

自由意志と神経科学

鈴木 秀憲 (Hidenori Suzuki)
名古屋大学 情報科学研究科

近年、自由意志に対する神経科学的アプローチとでも呼ぶべきものが登場してきている。中でも有名なのが神経科学者 Benjamin Libet による実験である。

Libet が行ったのは意図が意識に現れるタイミングの測定である。その方法は以下のようなものだ。まず、その縁を光の点が高速で移動する時計盤(陰極線オシロスコープ)を用意する。そして被験者にやりたいときにいつでも(しかしいつ行動するかをあらかじめ計画することなく)手首を曲げるように指示する。ここで被験者はその意図の Awareness が現れたときの回転する光の点の位置を(試行の後)報告するよう求められる。そして、被験者の頭には電極が取り付けられており、それによって脳活動の時間的変化が記録できるようになっている。

結果は、被験者が自分の意図に気づく約 350 ミリ秒「まえに」脳活動の電位変化(RP: 準備電位)が見られる、というものだった。これは一見して、われわれの行動は無意識に開始され、意識的な意図はただ後に続いて起こるだけ、という(やや不気味な)ことを示唆するものであるように思われる。実際、少なからぬ研究者たちが (Libet 自身はそう結論しなかったのだが)この実験が自由意志を否定すると考えた。

しかし、Libet の実験には少なからぬ方法論的問題があると考えられる。例えば意図の Awareness が表れた時点とは言っても、それはあくまで被験者が報告した時点に過ぎず、それが正確なものであるかどうかには疑問の余地がある。また、心と脳の関係や、自由意志についての彼の見解には概念的問題があり、その実験データを認めたとしても、彼がそうした問題について下した結論や示唆は正しくないと論ずることもできる。

こうしたことから(問題の性質もあって)Libet の実験は多くの科学者や哲学者の間に議論を巻き起こした。今回の発表で、私は「決定論と自由意志は両立する」という両立論の立場からこの実験や関連する議論について検討したい。両立論は基本的に物理主義的な立場であり、その観点からすれば、Libet の実験結果から即座に自由意志を否定したり、反対にそのような実験は無意味だとすることなく、Libet の実験を正當に評価できるように思われる。そうすることで自由意志について科学と哲学が共同で探求する可能性を示唆できればよいと考えている。